



吸音するタイル

弊社は岐阜県東濃地区のタイル産地の組合です。経済産業省管轄中小企業庁「官公需適格組合」の認定組合です。美濃焼をはじめ各種のタイルを官公庁建物や JR 建物・病院・美術館・大学などの現場に納品しております。

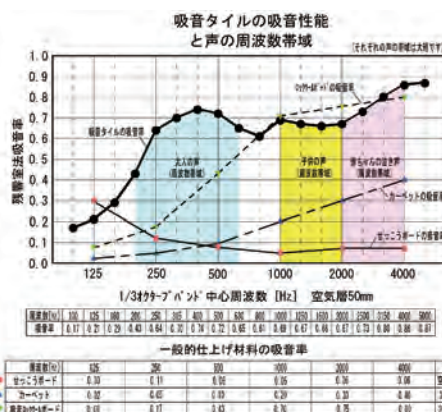
セラミックタイルは固く緻密な為 遮音・

反射材であっても吸音とは無縁の材料ですが、「吸音するタイル」をここに紹介致します。建物に使用する吸音材は穴あき吸音板や木毛板・グラスウール + 表面仕上げ材が主な選択肢でしたが、焼き物の上質な壁素材の空間となります。反響でうるささを感じる空間・音楽練習室・オーディ

オームなどにお使いいただけます。吸音材はその裏面に設ける空気層が音響性能に大きく関わります。グラフは裏面に 50mm の空気層を設けた状態での音響性能です。詳しい情報は弊社までお問い合わせください。



*CG によるイメージ画像です



* 日本建築総合試験所計測値



建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協定会通信 78

協同組合ケーエスジ ————— 表紙裏

大野 一彦

地域会だより ————— 1

新年あいさつ 2026 ————— 2

浅井 裕雄・西村 和哉・石橋 剛・野々川 光昭・山田 浩史・出口 基樹

愛知発:視察見学会

瀬戸のまちづくり&国際芸術祭あいち2025 ————— 5

瀬戸会場視察見学会

近藤 崇

連載【隔月 全6回】東南アジア建築紀行

第5回-「シンガポールから東南アジア建築の行く末を占う」- ————— 6

岩元 真明

三重発:建築ウォッチング

京都名作建築の旅 ————— 8

川崎 貴覚

寄稿

ニューヨークのまちを俯瞰する ————— 9

河合 慎太郎

新年広告 ————— 10

保存情報 第288回

京味もと井 ————— 11

川口 亜稀子

編集後記 ————— 11

鈴木 利明・恒川 和久

TOPIC

名古屋建築まつり2025 ————— 12

東福 大輔

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部

- ・1/16 支部役員会
- ・2/2 支部大会(静岡in伊豆の国)

■JIA静岡地域会

- ・1/23 第8回役員会

■JIA愛知地域会

- ・1/20 会員集会 会場 支部会議室&オンライン併用
「事業の見直し及び支部会費導入について」
- ・1/23 JIA愛知新年会 会場 Arcoba (アルコバ)
- ・1/23 第8回役員会
- ・毎週金曜日 JIA大学授業「建築家の仕事」2025
~1/23まで (名古屋市立大学 芸術工学部 芸工棟M101講義室)

■JIA岐阜地域会

- ・1/20 第9回役員会
- ・2/7 JIAの窓 講演会

■JIA三重地域会

- ・1/24 建築文化講演会2026

JIAに入会して

法人協会員



堀川 潤也(JIA愛知)

株式会社ニュースト 名古屋営業所

長野営業所との兼務という限られた時間の中で少しでも多くの方と交流させて頂きたいという一心で入会させて頂きました。愛知県内の大学出身ですので、私にとって愛知は第二の故郷です。その中で大好きな建築について様々な方とお話出来る機会をとても楽しみにしております。また同時に弊社の良さを少しでも知って頂けたらと思っております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

法人協会員



篠原 千尋(JIA愛知)

株式会社エフワンエヌ 中部支店

この度はJIAに再入会させていただき、誠にありがとうございます。再入会にもかかわらず、快くお迎えいただきましたこと、心より感謝申し上げます。JIAでの活動を通じて皆さまとの交流を深め、より価値の高い提案ができるよう努めてまいります。また、建築業界の発展に微力ながら貢献できればと考えております。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

表紙 建築の生まれるところ vol.10

ロゴデザイン・表紙デザイン 小林 ミハル (トロロスタジオ)

写真 田島 ナナ
(トロロスタジオ)

建築が生まれるところをテーマに写真撮影をしています。

締めくくり

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

支部長としての任期も、残り半年となりました。昨年の新年の挨拶では、取り組むべき「やることリスト」として、以下の7つを掲げました。災害対策、財政見直し、賛助会との関係、地域会と支部、若返り、建築家の職能、そして広報の役割です。欲張りすぎですが、いずれも私たちが直面している重要な課題です。

それぞれの進捗についてご報告します。まず「災害対策」は、現在WG(ワーキンググループ)によるアクションプランを策定中です。詳細は発表をお待ちいただきたいところですが、次年度には実行フェーズへと移行する予定です。

「財政見直し」については、支部の財政状況を把握する中で、愛知地域会と支部の補完関係が浮き彫りとなり、地域会の財政も含めて見直すことになりました。会員減少が止まらない中、固定費は増加傾向にあります。根本的な財政改革が必要であることを再確認しました。すでに支部会費

改定の話は少しずつ伝わっているかと思いますが、現状をご理解いただいた上で、支部の未来を共に再構築していただきたいと願っております。

「賛助会との関係」とは、主に愛知地域会の賛助会のことです。JIAの活動を支えてくれる重要なパートナーとしてお互いを再確認し、より良い関係に向けた新しいアイデアを具現化しています。例えば、賛助会リストを仕様書作成時に活用できるよう配信するなどの試みを始めています。

次に「地域会と支部」の関係についてです。支部は各地域会のサポート役として寄り添うことを目指しています。支部事業を各地域会で開催する模索として、三重での設計競技開催を実現できました。今後はホームページの改編により、支部内のイベント情報を同列で確認できるようにし、地域間でのイベント参加や活動の共有を促進していきます。

「若返り」については、「東海住宅建築賞」を中心に若い建築家の入会が増えています。また、全国10支部合同企画である「若手の建築

家討論会」では、登壇者の幅広いネットワーク化が進んできました。少しずつではありますが、若手の居場所作りができていると感じています。

「建築家の職能」については、新資格制度特別WGにおいて、士会連合会との2会合意が、この記事の発刊時には結ばれているかもしれません。スピード感をもって前に進んでいます。

最後に「広報の役割」ですが、こちらの議論はこれからとなり、機関誌アーキテクトのあり方を含め、次年度以降への課題となりそうです。

支部長としての残りの任期を、これらの課題解決に向けて邁進し、締めくくりの半年したいと思います。引き続き、皆様のご協力とご指導をお願いいたします。



JIA東海支部支部長
浅井 裕雄

持続可能な支部活動、支部体制のために

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

浅井支部長のもと様々な支部改革を掲げるなか、支部幹事長として早1年半となりました。

はじめは「建築家大会2023東海in常滑」頃から、次期の支部改革を耳にするようになり、たくさんの方々に支えられながら現在進行形の状況にあります。支部財政の改革は、まずは今までと現状把握から始まりました。それにより会員の構成、減少率、会費、機関誌「アーキテクト」の推移、各事業の収支等、を廻り、それは会として理解を深める機会となりました。「事業活動をしなければJIAとしての意味をなさない。半面、活動するほど赤字となる。」コロナ禍、物価上昇等、ここ数年の急激な社会情勢も変わる中で、収入源である協賛頼みとせず、

今までとは違う収支の在り方を考えないと、持続できないのが現状と捉えます。

一方、長年にわたり本部全国会議の「住宅等連携会議」で他支部会員との交流から知見も広がり、また昨年より本部理事に就任、本部報告でよく目にする方々にご挨拶させていただき、JIA全体の中での支部、地域会での活動の意義を知る機会となり、全国組織のなかでの支部を見直すことに役立てていると感じます。

JIA会員としての自覚と意義、社会に対してのJIA、建築家の役割を再認識し、持続可能な組織体制を引き続き見直していきます。

また今までの活動、社会発信に加え、若手や将来の建築家に繋がる活動の場を整理できれば幸いです。

昨年は厳しい財政のなかではあります

が、今だからこそ最初で最後と捉え、事務局をリニューアルしました。広く様々なバリエーションに対応できるようになったので、開かれたJIAとして是非積極的に活用いただければと思います。

支部幹事長は来期まで残り半年ですが、任期終了後も本部理事が1年続きます。本部との情報共有のなかで、引き続き支部財政の改革促進に励みます。

会員が減少する中での地域会も含めた組織体制の見直し、次期の運営改善へと続いていけるよう、邁進して参ります。



JIA本部理事
JIA東海支部幹事長
西村 和哉

新年あいさつ

東海支部大会(in伊豆の国)で会いましょう!

新年あけましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしくお願いいたします。

静岡地域会長に就任して4年が経とうとしております。この4年間で振り返ると、いろいろなことがありました。1年目、2年目の頃はまだまだコロナのせいでみんなで集まらないという状況が続く中、ストップしていた活動を元に戻すことで精一杯だったように思います。その後、徐々にいろいろな活動も元に戻り、最後の年には東海支部大会を静岡で開催するというおまけもついて、どうにか次の地域会長にバトンタッチができそうです。そうは言っても、会員数の減少が止まらないといった課題は残されたままであり、引き続き静岡地域会の発展に協力して参りたいと思います。

さて、「おまけ」と言いましたが、むしろ静岡地域会にとっては今年度のメインイベン

トである、来る2月2日の「東海支部大会in伊豆の国」では、東海支部の会員の皆様とお会いできることを静岡地域会実行委員会メンバー全員楽しみにしております。本号が届く頃でもまだ申し込みギリセーフだと思いますので(原稿を書いている11月末の時点では、まだまだ定員に余裕があります。申込期限が12月下旬なので、いっぱいになっていたらごめんなさい)、申し込みがまだの方は、申し込みをお願いします。葦山の江川邸(重要文化財)、反射炉(世界遺産)、村野藤吾設計の三養荘(豪華ランチ付き)、笠原一人先生の講演会と盛りだくさんの一日となっております。

また、こちらはほんとの「おまけ」ですが、前日の午後には、三島の街歩きと懇親会もありますので、ご都合のつく方はそちらもぜひご参加ください。三島地ビール、三島

コロケ、三島うなぎ、源兵衛川、看板建築、その他いろいろ。たぶん楽しいはずです。どうぞよろしくお願いいたします。



JIA静岡地域会長
石橋 剛

活動と運営の“新たな形”を探る必要性を実感

新年あけましておめでとうございます。
本年もどうぞよろしくお願いいたします。日頃より、支部・地域会の活動に格別のご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

私たちの地域会は、いま活動と運営の転換期を迎えています。社会情勢の変化に加え、会員減少と高齢化による人手不足が重なり、従来の活動を同じ形で続けることが難しくなってきました。活動の“新たな形”を探る必要性を実感しています。

今年で10回目を迎える猪高小学校建築教室は、教職員の負担軽減のため、これまでの二日間開催から一日開催に集約することになりました。この見直しにより、参加会員の負担も軽減され、限られた時間の中で建築の魅力と楽しさを伝える工夫を重ねています。また、10月に開催した「災

害相談」では、愛知弁護士会との共催により、建築技術にとどまらない災害支援のあり方を学ぶ機会になりました。他団体との協働が人材面においても効果をもたらすことを再認識したところです。この災害対策連続セミナーは、「森から考える災害対策」「災害相談」「仮設住宅デザイン提案競技会」などを通じて災害への関心を高めるとともに、行政や他団体との関係構築を進める取組でもあります。今後は、こうした行政、他団体、さらには他地域会や学生と連携しての活動が重要になると考えます。

一方、地域会収入はコロナ禍以降大きく減少し、運営が厳しくなっています。企業広告に依存した従来型の収益構造は限界に近づいており、自律的かつ持続可能な事業と運営について支部と検討を進めて

いるところです。近く皆様に改善案をご提示してご意見を賜り、会の将来について、皆様とともに考えていきたいと思います。

最後になりますが、今年の新年会は、従来のホテル宴会場を離れ、イタリアンレストランを一棟貸切で開催します。賛助会をはじめ学生や若手建築家も参加しますので、交流の場としてお楽しみいただければ幸いです。私の任期も残り半年となりましたが、引き続き皆様とともに活動に取り組んでまいります。それでは新年会でお会いできることを楽しみにしております。



JIA愛知地域会長
野々川 光昭

JIA 2026 新年あいさつ

地域に必要とされる団体である為に

新年あけましておめでとうございます。
会員の皆様におかれましては、輝かしい新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

岐阜地域会では、講演会・建築見学会・建築教室と多岐にわたる事業において、会員以外に参加を呼びかける事業に「JIAの窓」といった冠を付けて開催しております。地域で活動している非会員の建築家や建築を学ぶ学生に窓を開いて参加してもらう。と言ったコンセプトに基づき、交流を図ること、そしてその先で会員拡大に繋げることが目的です。

我々の事業に参加いただいた方からは「良い活動をしていますね」と言っただけの感想も頂きますが、「一緒に活動する＝入会」までたどり着くには、なかなか高いハードルがあります。参加者の多くは「その事業の内容に魅力を感じて参加するので

あって、JIAの活動に魅力を感じているわけではない」というケースが多く、JIAの活動に魅力を感じていなければ、入会には結びつかないわけです。「私が入って何ができますかね」と問われたことがあります。JIAとして出来ること、すべきことは様々あると思いますが、建築家としての個のスキルアップを磨くだけの団体ではないですし、建築家のコミュニティーサロンだけではありません。地域に存在する団体として、地域からどのように見られているのかを理解し、地域とどう関わっていくのかを考え活動をしなければ、団体の存在理由がないと考えます。

地域に必要とされる為に、団体だから出来ること、すべきこととして、「まちづくりへの参画」「子供の建築教育」「防災」の3つの必要性を感じています。いずれも少数で

は活動しづらい事業ですが、他地域会や他団体と協働したり、学生や地域の人を巻き込んだりして是非とも取り組むべき活動だと考えます。

会員拡大は難しいと述べてきましたが、有難いことにここ数年で、少しづつ岐阜の若手建築家が入会をしてくれています。新しいメンバーにJIAの活動や思いを伝え、バトンをつないでゆくこと。今年はそのことに注力する1年としたいなと思っております。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。



JIA岐阜地域会長
山田 浩史

世代について考える

新年、あけましておめでとうございます。
地域会長の任期も残り少なくなってきましたが、まだ事業はたくさん予定されていますので、気を緩めずになんとか完走したいと思います。引き続きご協力のほどよろしくお願いいたします。

さて、昨年より支部では、財政改革の議論がなされていますが、そのなかで会員の「年代」がよく取り上げられます。そこから「世代」について考えました。ざっと紹介すると、団塊(1947～1949)、しらけ(1950～1965)、新人類(1960～1970)、バブル(1965～1970)、就職氷河期(1971～1982)、ミレニアル(1980～1995)こんなところでしょうか。JIA会員のみなさまの世代と顔を思い浮かべると、一般的にいわれている特徴とは異なっても、その考え方や行動に世代による違いがあるのも、また事

実と感じます。(もちろん良い悪いではないです)

私は「バブル世代」になりますが、様々な機会に、それ「以前」や「以後」の会員のみなさまの考え方・行動・ふるまい等を見て、感銘を受けることがよくあります。「以前」の方には、論理力・行動力・決定力・発言力・引受力などを、「以後」の方には、熟考力・実行力・立案力・発信力・受容力などを強く感じます。(もちろん個人差はあります)もちろん我々の世代も引けは取りませんが、その違いに魅力や興味を覚えます。JIAには、そのような異なる特性や能力(しかも高い)を持った各世代の各地域の会員がいるわけで、これって凄いことだと思います。このJIAの良さを最大限活かすためには、異なる世代間・地域間の繋がりや集う仕組みが必要です。もちろんJIA自身がその仕

組みであるわけですが、既存のプラットフォームが機能不全に陥りつつあることも認識せざるを得ません。

今、支部や本部で議論されていることが、まさにプラットフォームの再構築になるのでしょうか、これからの「時代」におけるそのカタチは、全世代を包含しつつ、これからの「世代」により重心を置いた設えが必要ではないでしょうか。



JIA三重地域会長
出口 基樹

瀬戸のまちづくり&国際芸術祭あいち2025 瀬戸会場視察見学会 ●開催日:2025年10月24日(金)

概要

国内最大規模の国際芸術祭の一つであり、今回で6回目を迎えた「国際芸術祭あいち2025—灰と薔薇のあいまに」の開催に伴い、瀬戸市のまちなかが会場となったことを受け、視察見学会を実施しました。まず座学では、瀬戸市役所商工観光課の大森大地氏、瀬戸まちづくり株式会社の野杵晃輔氏より、瀬戸市のまちづくり施策や商店街の空き店舗対策、事業承継調査などについて説明を受けました。さらに、芸術祭会場の担当アーキテクトでありキュレーションチームの一員である栗本真彦氏から、瀬戸ならではの多様性に富んだロケーションと作品のマッチングについて解説がありました。その後、参加者は瀬戸のまちなかに繰り出し、銀座通り商店街やせと末広町商店街などを巡りながら、各会場で現代アート作品を鑑賞しました。

瀬戸市の背景と芸術祭誘致の経緯

瀬戸市は「せともの文化」のまちとして知られ、名古屋市中心部から約 18km、人口

約 12.5 万人。かつて陶磁器生産で賑わった街も、近年は空洞化が進み、中心市街地の商店街では空き店舗が目立っていました。この課題に対応するため、市と地元企業が 1999 年に設立した第三セクター「瀬戸まちづくり株式会社」が、家主と借主のマッチング施策を展開。2013 年頃から新規入居が増え、現在では入居希望者に対して物件が不足する状況にまで改善しています。こうした背景を踏まえ、瀬戸市は地域の魅力再発見と交流人口の増加を目指して、「国際芸術祭あいち 2025」を誘致。地域資源である陶磁文化を活かし、空き家や産業遺産を舞台にした展示計画を積極的に提案し、賛同を得ました。芸術監督フル・アル・カシミ氏は「人間と環境の関係」をテーマに掲げ、地質学的な時間軸や素材文化への着目を重視しました。瀬戸市の陶土や産業遺産は、これに強く共鳴したのだと思います。

視察の印象

まちなかで鑑賞した作品は、街に溶け込み

ながらも独自の存在感を放ち、スケール感や表現力に圧倒されました。どの作品も「瀬戸のまち」が刻んできた時間や歴史へのリスペクトを感じさせ、陶磁文化と現代アートの融合を体現していました。まちがアートを受け入れることで、地域に多様な人々を迎え入れる寛容性が育まれ、より魅力的な街になるのではないか——そう感じた視察でした。

主な会場と作品

視察・鑑賞した会場と作品を紹介します。各会場は「廃校」「古民家」「商店街」「鉱山跡」など、瀬戸の歴史・産業背景を活かした空間で、作品は「記憶」「時間」「素材」「人間と環境の関係」をテーマに、強い物語性と空間演出が特徴でした。



近藤 崇 (JIA愛知)

日本設計



■株式会社加仙鉱山

作家：ロバート・アンドリュース

特徴：鉱山跡を舞台に、先住民文化と鉱物資源の関係を探る作品。水や炭素を使った動的な描画装置で、時間と記憶を可視化。



■銀座通り商店街＋ポップアップショップ

作家：富安由真

特徴：元八百屋を舞台にしたインスタレーション。鉱山の砂や磁器の薔薇を使い、赤いライトや監視カメラ映像を組み合わせた幻想的な空間。



■旧瀬戸市立深川小学校

作家：アドリアン・ビシャル・ロハス

特徴：廃校の 1 階全体を使った大規模インスタレーション。給食室や廊下をサイバーな空間に変え、人類誕生前と滅亡後の世界を表現。



■せと末広町商店街 (松千代館)

作家：panpanya

特徴：大正期の旅館を活用し、瀬戸を舞台にした漫画作品を展示。街中に点在する漫画を集約し、ノスタルジックな空間で読む体験を提供。



■梅村商店 (古民家レンタルスペース)

作家：マイケル・ラコウィッツ

特徴：ISIS に破壊された古代アッシリア帝国のレリーフを新聞紙や日用品で再現。文化遺産の喪失を可視化。

シンガポールから東南アジア建築の行く末を占う

2ヶ月ほど前、福岡で開催された日本建築学会大会の記念講演に、オーストラリア出身の建築家リチャード・ハッセルが登場した。彼がパートナーを務めるシンガポールの設計事務所 WOH 社は、巨大な空中庭園を積層した高級ホテル「パークロイヤル・コレクション・ピッカリング」(写真①)や、立体的に緑化空間を組み込んだ大規模公営住宅「スカイヴィル@ドーソン」(写真②)など、高層・高密度の環境建築で知られ、東南アジアの建築界で際立った存在感を放っている。

「Form Follows Systems (形はシステムに従う)」と題した講演でハッセルは、敷地面積あたりの緑化量を立体的に測る「グリーン・プロット・レシオ」や、コミュニティ活動の誘発度を測る「コミュニティ・パーク・レシオ」、市民生活への貢献度を示す「シヴィック・ジェネロシティ・インデックス」など、建築を地球規模のエコシステムに位置づける独自の指標を紹介した。「資本主義社会では収益を生まない空間は削られがち。だからこそ、その価値を可視化する単純な指標をつくった」と語るハッセル。その発想に漂うテクノクラートの楽観主義は、実にシンガポールのようだと思った。

●シンガポール近現代建築の独自性

連載第5回となる本稿では、多くの東南アジア諸国が発展モデルとして参照する都市国家シンガポールの建築を概観したい。列強による植民地支配、戦後の独立と経済発展、そしてグローバル化を背景とした急速な都市化と、シンガポールが歩んだ近代化の軌跡は東南アジア諸都市の縮図といえる。

しかし、実際に訪れると、同地の近現代建築には他国と明確に異なる特徴がある。それは、非西洋の新興国がしばしば背負わされる「ナショナル・アイデンティティ」という課題に、ほとんど執着してこなかった点である。鉄骨造の軽快な架構が印象的な「テロック・アヤ市場」(1894年竣工)や、アールデコの造

形が美しい「タンジョン・パガー駅」(1932年竣工)など、植民地期にも多くの優れた建築が建てられたが、他国のコロニアル建築に見られる「土地固有の伝統文化をどう織り込むか」という葛藤は希薄に見える。こうした態度を象徴するのが、戦後復興期に建設された「市民戦没者記念碑」(写真③)である。日本占領期の民間人犠牲者を追悼し、多民族国家の団結を示す国家的記念碑でありながら、造形は簡潔かつ抑制的で、ナショナル・アイデンティティを強く喚起するとは言い難い(その素朴な姿ゆえ、市民からは「チョップスティックス」と親しまれている)。

シンガポールの近代を象徴する建築は、むしろ国民の約8割が居住するという公営団地「HDB」であろう(写真④)。HDBとは住宅開発庁(Housing Development Board)の略称であり、同時に公営団地そのものを意味する一般名詞でもある。レム・コールハースは「シンガポール・ソングラインズ」(『S,M,L,XL』に所収)で最初期のHDBを「建

築的な質を欠いた、膨大な量の板状住居の連なり」と形容した。他国の建築家たちが伝統と近代の統合を模索し、国家の象徴を建築に託そうとしていた時期に、シンガポールは日常的・実務的な住宅供給に粛々と取り組んだのである。つまり、「ナショナル・アイデンティティの創造」という新興国共通のテーマを脇に置き、テクノクラートの都市開発に徹したことで、シンガポールの都市・建築は制度合理性そのものを特徴とする独自性を獲得し、逆説的に際立ったのだ。

HDBの中央集権的な開発方針に抗い、1970年代には日本のメタボリズムに刺激された若手建築家たちが「ゴールデンマイル・コンプレックス」(1973年竣工)や「ピープルズパーク・コンプレックス」(1973年竣工)といった巨大複合施設を実現した(写真⑤)。しかし、ここにも伝統や民族性との接続は見いだしにくい。大胆なヴォリューム構成と機能混交、立体的なアトリウム空間は魅力的だが、風土の参照とはやはり無縁だ。



①「パークロイヤル・コレクション・ピッカリング」(WOHA, 2013年竣工)を街路から見る。



②「スカイヴィル@ドーソン」(WOHA, 2015年竣工)。



③「市民戦没者記念碑」(スワン & マクラーレン・アーキテクト, 1967年竣工)。



④南洋理工大学近くのHDB群。

⑤「ピープルズパーク・コンプレックス」(SPUR, 1973年竣工)。





⑥「マリーナ・ベイ・サンズ」(モシェ・サフディ、2010年竣工)。



⑦「リフレクションズ」(ダニエル・リベスキンド、2011年竣工)。



⑧「インターレース」(OMA、2013年竣工)。



⑨「ガーデン・バイ・ザ・ベイ」(ウィルキンソン・エア、2012年竣工)。



⑩「ジュエル・チャンギ空港」(モシェ・サフディ、2019年竣工)。

●グローバル化とグリーン建築

こうした無国籍的、制度合理的ともいえる傾向は、グローバル化下の大規模開発にも受け継がれた。モシェ・サフディを起用した「マリーナ・ベイ・サンズ」(2010年竣工)を皮切りに、ダニエル・リベスキンドの「リフレクションズ」(2011年竣工)やOMAの「インターレース」(2013年)など、2010年代以降のシンガポールには世界中からスター・アーキテクトが集まり、アイコン建築が乱立した(写真⑥⑦⑧)。

一方、その全体からはひとつの明確なトレンドも浮かび上がる。それは建築の緑化、すなわち「グリーン建築」の隆盛である。国策としての後押しもあり「シンガポール独自の環境評価基準「グリーンマーク」を取得すると容積率が緩和される制度が導入された」、ケン・ヤングによる「ソラリス・センター」(2011年竣工)、伊東豊雄による「キャピタグリーン」(2015年竣工)、そして、冒頭で紹介したWOHAの一連の作品など、その例は枚挙に暇がない。

しかし、ここで問うべきは、こうしたグリーン建築が風土性への回帰なのか、それとも西洋的価値観を再演しているだけなのか、という点である。熱帯気候が植物の生育に有利であるのは確かだが、グリーン建築は東南アジアに限らず、日本や欧米を含む世

界的な潮流となっている。ハーワードの田園都市やル・コルビュジエの「輝く都市」を引くまでもなく、「都市緑化」は近代都市計画の中心的命題であり、必ずしも土地固有の文化に根ざした概念ではない。シンガポールが掲げるグリーン・シティ像には、自然環境そのものを制御しようとする西洋近代的な野心が潜んでいるようにも思われる。

この意味で、世界中の植物を室内に閉じ込めた「ガーデン・バイ・ザ・ベイ」(2012年竣工)や、巨大な室内森林を実現したモシェ・サフディの「ジュエル・チャンギ空港」(2019年竣工)は、きわめて「シンガポールの」だと言えるだろう(写真⑨⑩)。空調技術によって熱帯気候を制御し乗り越えた建築を、欧米列強が植民地期に建てた「温室」に相当するものと解釈することも可能である。

●シンガポール・モデルの限界

シンガポールの華やかな都市建築の背後には諸外国への依存がある。政府統計によれば、食品の約9割は輸入に頼り、建設労働者の8割超は外国人だ。つまり、シンガポールの都市・建築は不可視の格差に支えられている。シンガポールの都市モデルがグローバル金融資本主義における成功例であることは確かだが、格差の上に成立して

いる以上、すべての東南アジア都市が同じ道を歩めるわけではない。

一方で、これまで連載で紹介してきたように、東南アジアの別の場所では、地域の課題に応答する草の根的な実践が芽生えている。タイのチャポン・チュエンルディーモールやベトナムのヴォ・チョン・ギアらは、制度から始まるのではなく、ボトムアップの視点から設計に取り組む。その作品は、制度合理性を洗練させたシンガポールの都市建築と鋭い対照をなす。この両極を架橋する建築家が現れたとき、東南アジア建築は新たなステージへと進むのではないだろうか。

*写真①～⑩は筆者撮影



建築家
岩元真明 いわもと まさあき
九州大学准教授、博士(工学)

建築家、九州大学准教授、博士(工学)。
2008年東京大学大学院修士課程修了後、難波和彦+界工作舎に入社。
2011年～15年にヴォ・チョン・ギア・アーキテクト(現VTNアーキテクト)のパートナー兼ホーチミン事務所所長。2015年よりICADA共同主宰。
首都大学東京特任助教、九州大学助教を経て、2024年より現職。近刊に『ヴァン・モリヴァン——激動のカンボジアを生きた建築家(西山卯三記念叢書1)』(millegraph, 2025)

京都名作建築の旅 ●開催日:2025年11月15日 ●参加者:会員3名+その他3名 計6名



京セラ美術館

今年度の『JIA みえ建築ウォッチング』は来年 2026 年1月24日（土）に開催される『建築文化講演会』で、登壇される青木淳氏の代表作の京セラ美術館をメインとした京都の近代建築を見学しました。

京セラ美術館

京セラ美術館は2年もの改修工事を経て、2020年5月にリニューアルオープンしました。

1933年に、公立の美術館としては国内で2番目に誕生した京都市美術館の新たな姿です。

少し離れて正面に立ってみると、帝冠様式と呼ばれる和と洋の意匠が融合する壮麗な外観に圧倒される。そして視線を下げると引き込まれるように、ガラス張りの地下スペースに足が自然に向いてしまう。

この地下スペースがメインエントランス、

ミュージアムショップ、カフェのある「ガラス・リボン」で、改修事業のシンボルとなる場所です。

この「ガラス・リボン」には、大事な役割があって、「開かれた美術館」として人々を優しく受け入れてくれる受け口なのです。

この美術館は特定の人のためのものではなく、展覧会・イベントをみる目的のない人でも入ることができる場所にするために、入りやすい雰囲気になっています。

「ガラス・リボン」からロビーを歩いて1階の中央ホールへ。そしてそのまま東側の日本庭園に通り抜けてもいいし、中央ホールかららせん階段を使って2階へ上がり、東山キューブ・テラスで敷地内の日本庭園の景色を見るのも良い。

この紹介した場所はすべて無料で行けるのがすごい。

ロームシアター京都

今は「ロームシアター京都」というオシャレな名前になっていますが、改修前の旧名称は「京都会館」とのこと。本劇場は伝統芸能から現代演劇やダンスまで、多彩な表現を生み続ける文化の場、大小の3つのホールからなり、カフェや蔦屋書店が入っている商業施設です。1960年に前川國男氏の設計で「京都会館」が完成しました。その半世紀以上たった2016年に香山壽夫氏が「ロームシアター京都」を完成させました。京都を代表する劇場というだけあって、そのヴォリュームは大きなものになっています。

今回は、刷新されたホールの空間なども見たかったのですが、当日は全ホール貸切ということで見学は叶いませんでした。

東華菜館

最後に「東華菜館」に移動して、鴨川を眼下に望むことのできる異国情緒のある個室で、宮廷料理として発展した気品漂う北京料理をいただきました。この「東華菜館」は1926年（大正15年）、ウィリアム・メレル・ヴォーリス氏の設計によって竣工しました。ヴォーリス氏は、大学や教会など美しい建築を多く残したことで知られてますが、レストラン建築としては「東華菜館」だけです。スパニッシュ・バロック様式の洋館として竣工したこの建物の玄関ファサードはデコラティブな装飾が特徴で、ヴォーリスが設計した家具や調度品も、店内に多く残されています。

「京都の建築」と聞くと、町屋や神社仏閣などを思い浮かべる人が多いかもしれませんが、京都は近代建築の宝庫でもあるのです。明治、大正、昭和に建てられた京都の西洋風建築は、さまざまな人の手と思いを守られ、現在もその佇まいを残しています。私たちは、我々の先人の思いに、そして日本という平和な国に感謝です。



ロームシアター京都



東華菜館

川崎 貴覚 (JIA三重)

川崎建築設計室



ニューヨークのまちを俯瞰する

昨年の9月に全国市街地再開発協会の視察でニューヨークを訪れた。私は初めてのニューヨークだったので、見るものすべてを写真に撮って帰りたいと思ったのだが、果たしてどうすればいい写真は撮れるのだろうか。ニューヨークは言わずもがな摩天楼の街である。私を含めて建築に携わる人たちは、やはり広角のレンズでまちや建物を写したい衝動にかられると思うのだが、それではニューヨークの超高層ビルは、全景を撮ろうとするとかなり引きの絵になり、近くで撮ると全体が写らないというジレンマが生じそうである。というわけで、装備としては広角レンズと望遠レンズを両方携えて旅立つことにした。ニューヨークに着き、地面から摩天楼を見上げるとやはりそうだった。摩天楼を意味する SKYSCRAPER は空を切り裂くという意味であり、細長い（ありえない塔状比の）ビルが空を切り裂いている。やはりこれは撮りたい絵ではない。そうだ、展望台の上からまちを撮ろう。ということで展望台をハシゴすることにした。以下訪れた3つの展望台を紹介する。

1. ワン・ヴァンダービルト

グランドセントラル駅の隣に建つ再開発ビルで、駅との地下接続や地下鉄駅の改良を貢献要素として容積ボーナスを受け、容積率3,000%・高さ427mで建てられている。展望台からの眺めはさることながら、室内の床・壁・天井をすべて鏡面で仕上げており空間が無限に続くような視覚効果による演出やアートによってフотスポット化し、現代の観光名所となっている。



▲ ワン・ヴァンダービルト 内部鏡面仕上げの展望台



▲ ワン・ワールド・トレード・センターからの眺望

2. ワン・ワールド・トレード・センター

ワールドトレードセンター跡地に建つ高さ541m(尖塔含む)の超高層ビルである。展望台はおそらくマンハッタンで最も高い位置にある展望台で、マンハッタン島から近隣の対岸まで見渡せる。最上階につくと映像によるトレードセンターの歴史が紹介された後、スクリーンが開き外の景色が現れるという演出が素晴らしく、さすがエンターテインメントの国だなと感じた。3つの中では最もオーソドックスな展望台と言える。

3. ロックフェラーセンター

1939年に完成したクラシックな超高層ビル（高さは約260m）位置的には3つの中でセントラルパークに最も近く、唯一セントラルパークの長方形を視認することができた。また、この展望台は屋外であり手摺がなくガラスの反射を気にすることなく写真を撮れるという、撮影には最も条件の良い展望台となっている。（雨だったら悲惨でした。）料金的にも他の2つに比べて安いので、個人的には最も満足感のある展望台である。



▲ ロックフェラーセンターからエンパイアステート、奥にワン・ワールド・トレード・センターを望む



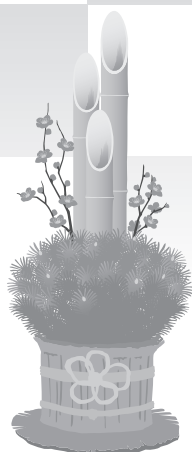
▲ ロックフェラーセンターからセントラルパークを望む

他にもニューヨークの展望台と言えば、エンパイアステートビルやクライスラービルなどクラシックなものから、ハドソンヤードの再開発エリアに新しくできた「エッジ」など、まだまだ行くべき展望台はありそうだが、時間の関係で展望台ばかり行くわけにもいかないので諦めて、美術館巡りやショッピングなど、いわゆるニューヨーク観光もして帰路についた。総じて感想としては、古き良き時代の建物がちゃんと手入れされて使われているという印象を受けた。ロックフェラーセンターやグッゲンハイム美術館、シーグラムビルといった近代の建造物が古いと感じさせない存在感を放っていて感動した。ニューヨークは生きているうちにそう何回も行けると思えないが、20年後ぐらいにまた行ければ、おそらく健在であろう（健在であってほしい）ロックフェラーセンターの展望台に上り、また街を俯瞰したいと思う。

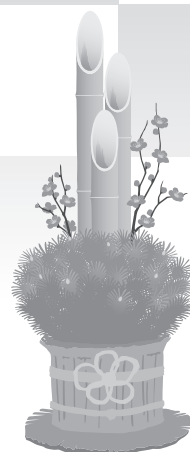


河合 慎太郎 (JIA愛知)

アール・アイ・エー名古屋支社



新年 あけまして おめでとうございます 2026年



(静岡・愛知・岐阜・三重地域会 五十音順)

(同)石橋剛設計事務所 代表社員 石橋 剛 〒410-2114 伊豆の国市南條1391-9 TEL:050-3786-1484 FAX:050-3730-5082	(株)伊藤建築設計事務所 代表取締役社長 小田 義彦 常務取締役名古屋事務所長 富田 昌志 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 桜通ビル TEL:052-222-8611 FAX:052-222-1971	(株)オウ環境設計事務所 代表取締役会長 中西 暉 代表取締役社長 野々川 光昭 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-32 上前津KDビル6階 TEL:052-242-2331 FAX:052-242-2354
(株)黒川建築事務所 代表取締役 黒川 喜洋彦 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-9 スガキコ第2ビル2F TEL:052-203-0281 FAX:052-203-1884	(株)三和建築事務所  取締役社長 見寺 昭彦 〒455-0015 名古屋市港区港栄4-5-5 TEL:052-661-2211 FAX:052-661-2247	(株)中建設計 取締役相談役 石田 壽 代表取締役 岡 潤和 〒460-0008 名古屋市中区栄2-2-12 NUP伏見ビル 5F TEL:052-222-7850 FAX:052-222-7856
森建築設計室 森 哲哉 〒468-0007 名古屋市中区植田本町2-812-1 TEL:052-807-3205 FAX:052-807-3206	(株)ヤスウラ設計  代表取締役 水野 豊秋 〒460-0007 名古屋市中区新栄2-35-6 TEL:052-241-7211 FAX:052-241-7333	裕建築計画  浅井 裕雄 〒464-0804 名古屋市千種区東山元町2-43 101 TEL:052-788-7744 FAX:052-788-7761
(株)ワーク○キューブ 桑原 雅明 吉元 学 平野 恵津泰 〒460-0024 名古屋市中区正木1-13-14 TEL:052-265-8412 FAX:052-265-8402	パナソニック(株) エレクトリックワークス社 中部エンジニアリング部 博多 晃子 〒450-8611 名古屋市中村区名駅南2丁目7番55号S5F TEL:090-6964-5031 FAX:052-581-7734	(株)ピアレックス・テクノロジーズ 廣瀬 直輝 〒595-0016 大阪府泉大津市条南町4-14 TEL:0725-22-5361 FAX:0725-22-5363



覚王山日泰寺の西隣、160坪の黒塀に囲まれた広大な敷地に洋館付き住宅が建つ。

腕木門の白い暖簾を潜ると高低差のある広い庭が広がり石畳の先に洋館の玄関が見える。

洋館はメープルの腰板と庭に面する3連窓と、折り上げ天井が特徴で、2階建の和館広縁へと繋がっている。広縁の西側に階段があり2階の縁側から座敷2間へと続く。

10年程空き家だったが保存状態が良く、2021年に京料理店としてオープンさせた。

20席程の店として1階座敷をカウンター席に改装。2階は2室の個室で可変なく利用。閑静な住宅地の中で美食を味わう京割烹店として活用されている。

無双窓や透彫、組子細工など、丁寧な伝統技術を残し、築85年の日本家屋の良さを活かして、出来るだけ可変なく最低限の改装を手掛けている。

可変部分も自然素材にこだわり、樹齢300年の赤杉に浮造りを施したカウンターや市松張りの天井板、透かし欄間を空調吹出力バーへ

転用され、新旧の職人技が融合された空間が見所となっている。

所在地 名古屋市千種区西山元町1丁目58

建設年 1939年(昭和14年) 建築

2021(令和3)年 店舗改修

構造・規模 木造平屋一部2階建 桧瓦葺き

川口 亜稀子(JIA愛知)

Liv設計工房



編集後記

●新年1月号に相応しく、冒頭の東海支部と各地域会首長の方々の新年あいさつに改めて清新な身の引き締めを覚えます。お疲れ様です、本年もよろしく願いいたします。

本号では特に昨今の海外随所の超高層ビル事情の記事に多く目が留まりました。連載の「東南アジア建築紀行」はシンガポールからの近未来知見で、板状公営(超)高層住棟の頂部連携(やグリーン建築)動向が今やグローバル著名な超高層連棟ホテルの「マリナ・ベイ・サンズ」にも通じるとの慧眼!寄稿「ニューヨークのまちを俯瞰する」の世界に冠たるスカイスクレーパー群の再開発起源とも呼応します。

支部や地域会の会勢や会財政の建直しが厳しく俎上に乗る難局ながら、旧いブリテン子

として、より魅力ある活動や日常交流を当誌から力強く発信持続できること、心から祈念して止みません。(鈴木 利明)

●新年号は、役員のみなさんのご挨拶を通して地域での実践と、世界の動向を往復しながら、建築の役割を静かに問い直す内容でした。連載「東南アジア建築紀行」では、シンガポールを起点に都市・住宅の制度とデザインの接続が描かれ、開発の速度の中で何を守り、何を更新するのかという問いが立ち上がります。寄稿「ニューヨークのまちを俯瞰する」からは、スケールの異なる視点を重ねて都市の厚みを読み解く手つきに刺激を受けました。加えて、本誌9月号でも紹介した初めての「なごや建築まつり」は盛況のうちに開催でき、特別公開やガイドツアーを通じて、名古屋のまちを新たな視点で体験する機会となりました。実行委員の一人として、来年度以降も継続し、市民

へ建築の魅力を発信するイベントとして、JIAの皆さまの協力も仰ぎながら着実に育てていきたいと思っています。(恒川 和久)

ARCHITECT

第448号

発行日 2026.1.1 (毎月1回発行)

発行責任者 浅井裕雄

編集責任者 東福大輔

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会広報委員会
株式会社イズミ内
ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564) 21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail: shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/

名古屋建築まつり 2025

ーゼネコン設計部作品を中心に

普段は一部または全て一般公開していない建築物を公開するイベント「名古屋建築まつり 2025」が、11月13日から16日にかけて名古屋市中心部で開催された。近年、「生きた建築ミュージアムフェスティバル(イケフェス大阪)」を皮切りに、「東京建築祭」「京都モダン建築祭」など、各地で同様のイベントが行われてきたが、名古屋では初めての開催となった。

キックオフ・イベントとして、「名古屋音楽堂」にて「まちなみデザイン賞」の授賞式と記念シンポジウムが行われた。これまでの授賞式は、役所内で行われるクロースドなものであったが、今回は「まつり」との同時開催としたこともあって、市の担当者も「今回はがんばりました!」と胸をはる華やかな催しとなった。

今回このイベントで見学可能になった建物は、「タマディック名古屋ビル」「浅沼組名古屋支店」といったここ数年に竣工した注目の現代建築をはじめ、「コンダーハウス(旧名古屋銀行本店)」「料亭か茂免(旧



「オアシス 21」を現地で説明する葛西氏

中井巳治郎邸)」のような近世～近代の建築遺産など、バリエーションに富んだものだった。筆者は、アトリエ系設計事務所の作品はすでに見たものが多かったこともあり、ゼネコン設計部の作品を中心に参加することにした。

「中日ビル」と「オアシス 21」の見学では、始めにそれぞれの建物の設計担当者のプレゼンテーションを聞くことができた。竹中工務店の「中日ビル」担当者の、設計と件から演繹的に建築を生み出してゆくプロフェッショナルなプレゼンには感心したが、ゼネコンに勤務経験がある筆者にとっては既視感を覚えるものだった。だがその一方で、32歳の若さで「オアシス 21」のコンペに勝ち、監理までおこなった大林組の葛西氏の語り口はそれとはだいぶ異なるもので驚いた。

このコンペは筆者がゼネコン設計部に就職したばかりの頃に行われたが、ガラスの巨大な池を空中に浮かべるという案で大林組の若手が獲ったと聞きし、どうしてゼネコンが? そんな荒唐無稽な案で? と疑問が尽きなかった。当時の「大林組の若手」本人の人柄に触れ、素人にも分かりやすいプレゼンテーションを聞いてとても納得がいった。

氏は「こういう公園の設計は普通は設計事務所がやるものなので、大林組にはノウハウが全然なかった」と語ったが、逆にそのノウハウのなさが、若者の熱量を具現化させる原動力となったのは想像に難くない。なぜゼネコンがこのコンペに勝てたのか? コンペの制度上の問題なのか? それとも設計事務所の資質の問題なのか? は考えてみる必要はあるが、会社側からの(良い意味での)不干渉は一つの理由になると思う。

コンペが行われたのは1997年であり、もうすぐ30年となる。来年にはリニューアル工事も予定されているそうだ。建築的な評価はさておき、ゼネコンが設計に関わることでマッシブな構造と造園によるハイブリッドな庭園が実現し、今となっても多くの観光客が訪れる施設となっている。

「第2名古屋三交ビル」は、三重交通傘下の不動産会社が保有する貸オフィスビルである。外観こそ無個性なビルだが、入口部分にオフィスロビー的な大きな屋内型公開空地が設けられ、それによって容積割増を受けている。総合設計上の公開空地はしょせん「空地」に過ぎず、賑わいが生まれることはなかった。ここに一定の商業的活動を認めることで、活気を持ち込むことを狙った「Nago まちスペース」制度を活用した初めての事例となっている。その内装を彩るルーバーにデジタル・ファブリケーションが用いられている点が注目されがちだが、個人的には開発手法の方が興味深かった。

「名古屋建築まつり」では、さまざまな大学の建築学科の研究室がそれぞれ建築物を担当し、来訪者の誘導や説明を行っている。突っ込んだ質問には同行している教員の手を借りなければならないものの、他人に説明することは、建物はもちろん、建築自体をよく理解する機会になっていると感じた。内部を見学する機会を与えてくれるのは嬉しいのはもちろんだが、教育的な意味でもぜひ続けていってほしいものである。

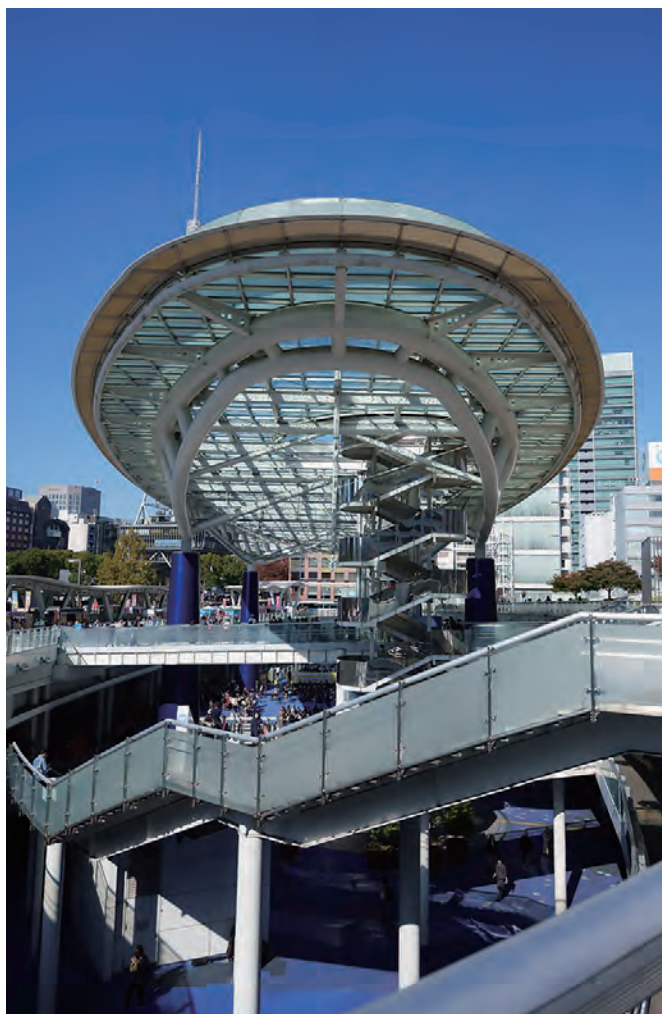


東福 大輔 (JIA愛知)

零三工作室



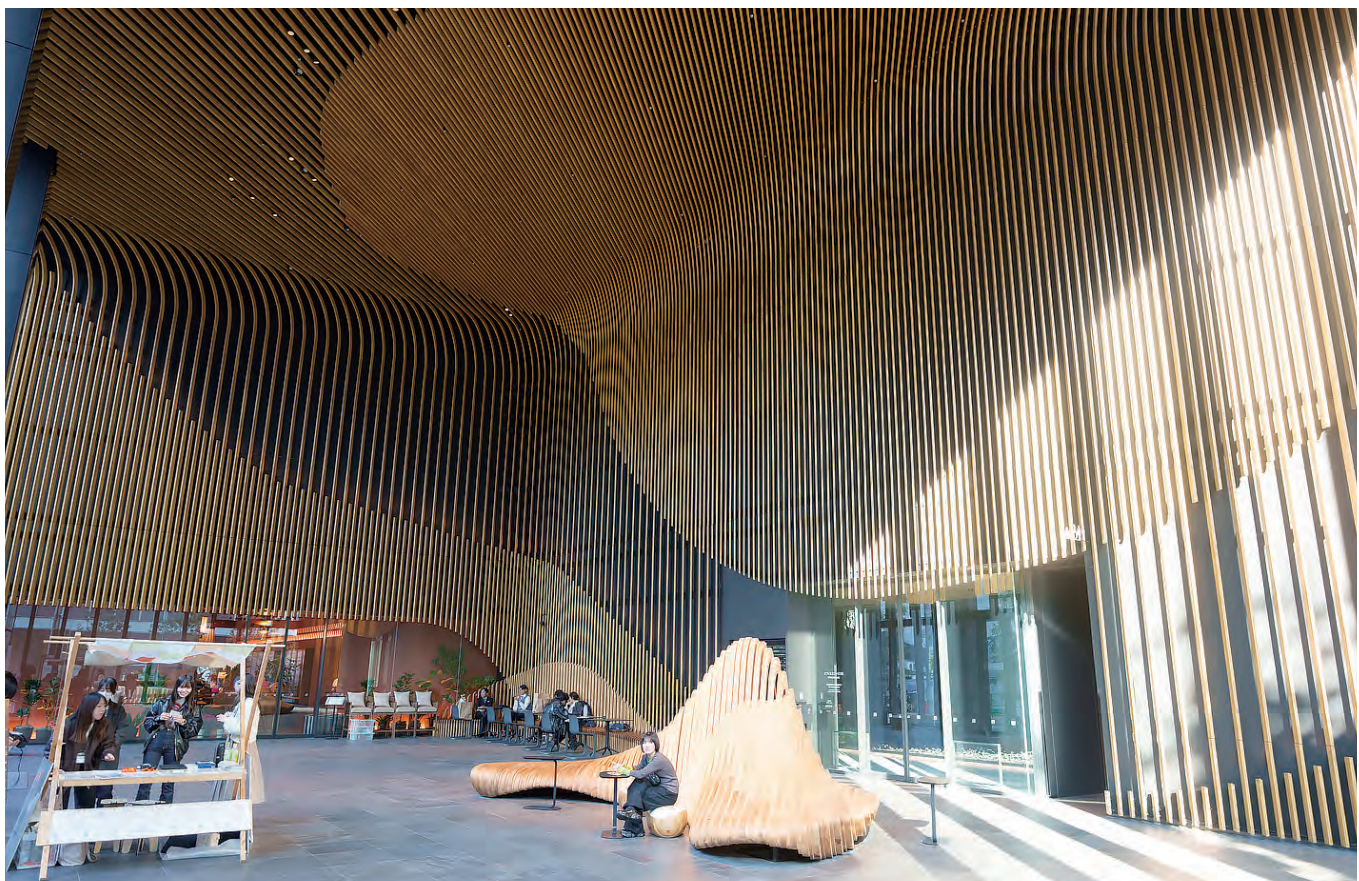
「名古屋能楽堂」名古屋市建築局・大江宏建築事務所、1997



「オアシス 21」大林組、2002



「中日ビル」竹中工務店、2023



「第2名古屋三交ビル」竹中工務店、2024

TOTO



使う
Use
カンタン操作で
無理なく続けられる

DAILY WELLNESS

変わる
Change
健康アドバイスを
活用できる

気づく
Notice
アプリで記録を
見ることができる

トイレ行だけ健康習慣

NEOREST
LS-W / AS-W

■本商品は、スマホ専用アプリを利用します

便スキャンセンサーで落下中の便をスキャンし、
便の形(硬さ)・色・量を自動で計測します。



TOTO技術相談室 電話:0570-01-1010
受付時間:〈平日〉9:00~18:00〈土曜日〉9:00~17:00
(日・祝日・夏期休暇・年末年始・当社所定の休日などを除く)
建築専門家のための情報サイト
COM-ET(コメット) <https://www.com-et.com>
DAILY WELLNESS | ネオレストLS-W/AS-W 商品ページ ▶



三協アルミ クロス・スタイル

Xstyle

想いが住まいとクロスする。
SCREEN / CARPORT / GARDEN ROOM & TERRACE



三協立山株式会社 三協アルミ社

■東海エクステリア建材支店
〒480-1114 愛知県長久手市長配3-606 TEL(0561)64-2567

■静岡事業所
〒422-8065 静岡県静岡市駿河区宮本町9-35 TEL(054)203-5572

建築局庁舎(行政棟)

やさしく 強く—
木はアルミをまとい、未来へ羽ばたく

AW 木・アルミ複合断熱スクリーン
ALUTAS WOOD SCREEN

BG 木・アルミ複合防球格子建具
BALL GUARD

反射板式消音システム
ノイズバスターシリーズ

ホームページリニューアルしました

株式会社 ニュースト
<https://www.newxt.co.jp>

〒387-0006 長野県千曲市粟佐1603番地

「ARCHITECT」は日本建築家協会(JIA)
東海支部の機関誌です。

会員・協力会員のほか、全国のJIA各支部、東海
地方の大学・自治体などに配布されています。

